

2. 診療放射線科技師の視点から考える検像のあり方

松田 恵雄 埼玉医科大学総合医療センター中央放射線部

執筆に先立ち、「検像」という言葉の意味について、いまだ統一見解が出されていない中、それぞれの筆者がそれぞれの観点で検像について考察した場合、読者諸兄に、さらなる混乱を招く恐れがあることについて、本稿は少しも配慮していないことをお断りしたい。つまり、本稿に論述された検像は、現時点で筆者の考える筆者の検像であり、結果的に統一的な見解とはほど遠いかもしれない。また、本稿は診療放射線技師の視点から考えるというより、あくまで、診療放射線技師である筆者の視点で執筆されている。当然、本稿を読まれた多くの診療放射線技師からは、お叱りの声が寄せられるかもしれないし、見間違いと一蹴されるかもしれない。それでも、「検像の本質」とは何かを考える上で、読者諸兄が下す判断の一助になればとの思いで筆を進めた。

また、診療放射線技師の視点から検像を考える場合、診療放射線技師という職種の特徴に触れるような、デリケートな問題についてある意味バツサリ切り込む必要

がある。検像という行為は、診療放射線技師にとってその実施当事者というだけでなく、存在価値の一部にもかかわる概念だと考えられ、それを避けては通れない。この辺りも、「診療放射線技師の視点から考える検像」の特徴であろう。

それでは一体、診療放射線科技師の視点から考える検像とは、どのような概念であろうか。多くの場合検像は、画像に対する品質保証を言い表す言葉として用いられるように思う。確かに、画像の最終確認をある一意（一定ではない）の条件で行うのだから、保証要件の一部を言い当てているとは思いますが、品質保証における本来の概念はいくばくも満たしておらず、遠く隔たりがある。

本稿では、「この検像とは？」を考えた上で、後半に、「検像システムとは？」についても考えてみたい。なお、検像システムの機能要件にはあえて触れない。この辺りの論述は他の著名な先生にお任せし、本稿がテーマとするのは、あくまで検像という行為の本質のみである。

そもそも検像はいつから行われ、どのような行為だったのか

検像という言葉自体は、昭和大学横浜市北部病院の新田らが、フィルムレスシステムを構築する際、「参照側に与える悪影響を最小限に止めるべく影響を洗い出し対策したもの」として、検像システムの必要性を唱えたのが初めてだと記憶している。いまから10年以上前に、この機能の必要性を確信していたことになる。

一方、言葉は別にして、その概念が生まれたのはいつからなのかというと、まったく想像もつかない。もちろん、筆者が新米の診療放射線技師として就職した当初にも、この概念はあった。そのころは、いかなる撮影を行っても診察や読影にまわす前に必ず1回、先輩技師の前に設置されたシヤウカステンにフィルムを掛けて、適否の判断を仰ぐことが職場のルールとなっていた。何か画像に不具合があると、そのフィルムは横に置かれた段ボール箱に無言で放り捨てられ、いわゆる“ロスフィルム”（つまり再撮影）となっていた。

たぶん、これが検像ということになるだろう。まだまだ医療がいまほどギクシャクしていない、おおらかな時代の業務手順の中で、それでも診療放射線技師という職種に任された責任と誇りを守るための重要なステップだったと心に焼き付いている。このとき先輩が行っていた検像という行為は、あくまで成果物（画像）